口語詩句５月総評　　龍　秀美　　202305

＜5 月総評＞

　今月の作品群にはこの欄が安定してきたという感じを受けました。口語詩句とはこういうものなのだという感じが、そこはかとなく、しかしあるかたちを見せてきたような手ごたえがあります。この総評に選んだ作品も十代から七十代に至るまでバラエティに富んでいます。みなさんが冒険心をもって楽しんで制作しているということでしょう。

この国の余白に住んでさえいれば

合川秋穂　東京都

――そう、「余白」にいれば大丈夫。しかし余白が狭くなりつつある感じも。

狂うにはみずみずしすぎる通学路

ベロニカ　神奈川県

―「通学路」という言葉自体が絶対的にみずみずしい。

骨壷を揺らせばカタコトとなって

少しやわらぐわたしのいのち

まちりこ　埼玉県

――まるで死者と生者のひそかな通信のような、普遍的な感覚がある。

きのう見たゆめ
の
話をたたみ終え
母が取り込むせんべい布団

さいう　愛知県

――「せんべい布団」というレトロな言葉に母の夢も偲ばれる感じ。

茄子を煮る夜になっても構わない

松下　誠一　東京都
――茄子は夜に似ている。茄子を夜に煮ている。

自治会の会長による獅子舞を
見るという時間の使い方

松下　誠一　東京都

―町内の祭りに参加するということも、それが自治会の会長による獅子舞だということも、みんな一度しかないこの世のこの場限りの時間。

少なくとも一般人からすれば多分

全てがサラダ記念日の焼き増し

源楓香　東京都

―思わず納得してしまう。詩歌人の苦心惨憺も、かつてないブームで短歌を日常に取り込んでしまう「一般人」の食欲の前に。

不器用でみつあみの下手だった父

ビスコ　愛知県

――父に三つ編みをしてもらっていたという珍しい経験。不器用さのなかに立ち昇る愛情。

糾うという意を知らず
禍福とは
空より降りてくる紙のよう

からすまぁ　神奈川県
――禍福は糾える縄のごとしというが、善も悪も理由があるわけではなく、ただ空から降りてくる紙切れのようにきまぐれだ。

夏畑ジャンヌ・ダルクの母は生き

杢いう子　佐賀県
――我が身を捧げて歴史を変えたジャンヌだが、その母は営々と農民として生きた。二つの存在があってこそ生まれてきたに違いない特殊と普遍。

あれは嘘、これは本当、実は嘘

家庭用ビデオはとっくに

捨てました

いまはじまるの　兵庫県

―家庭用ビデオに撮られる場面は、あるべき家庭の姿ばかり。欲望も虚飾もあるが、それを積み重ねていくことが家庭の営みかも知れない。

魂の眠るところはどこですか

案外目のよな気がしませんか

マズルカ　山口県

―目は心の窓と言いますね。しかし目が働いているとき案外意識は眠っているのかも。

さみしいから

あなたを探していた

あなた

というのは例えば公園の木のこと

村上　すう　京都府

――あなたはどこにでもいるが、どこにもいない。だれでもあり、だれでもない。

口の形を知っているさくらんぼ

うたた　岡山県

――さくらんぼのような口ではなく、口のようなさくらんぼ。より可愛くセクシー。